恵の風

ハンセン病問題を教訓に 歴史資料館から学ぶこと

菊池恵楓園歴史資料館 リニューアルオープン

菊池恵楓園歴史資料館が五月にリニューアルオープンした。総額費用は約五億円。入所者の方々やその家族、職員の方々の思いやメッセージがつまった資料館だ。

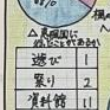
今年五月、菊池恵楓園歴史資料館がリニューアルオープンした。

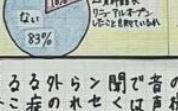
この資料館は、入所者の働きかけにより作られた。以前は、園内を歩き回りながら自分たちの生き方や体験を語っていたが、より深く知ってもらい、この出来事を未来に伝えてほしいという思いからこの資料館を作ることを決めたそうだ。意見が出たのは七年前で、全国の資料館をまわり、何年間も協議を繰り返した結果資料館が完成した。

私たちは早速資料館を見学することにした。この資料館は、「ハンセン病問題を教訓にさまざまな偏見と差別の解決を目指す」「ハンセン病のことを深く知り、何度も行って知識を広げ、自分の意思で学んでほしい。楓の森生徒には、自分達がハンセン病を正しく知って、説明することができる人になってほしい。ハンセン病のことを知らない人などに差別は良く無いということを多くの人に発信してほしい。

〈人権教育担当 小山裕子先生〉

生活している方々の思いやハンセン病についての正しい知識を学ぶことができ、資料館ができたことは本当に良かった。資料館の一番心に残った展示物は、短歌だ。入所者の方々の家族に会えない悲しさがあっても前向きに生きていこうという気持ちが感じられた。





楓の森中学校（生徒の人）へのアンケート

遊び	1
祭り	2
資料館	11
保育園	1
その他	14

資料館に何度も足を運んで欲しい

恵楓園歴史資料館を見学された先生方にインタビューをした。

〈渕上佳宏校長先生〉

入所者の方々が高齢なのでハンセン病の正しい知識を周りに伝える人が少なくなっている為、施設として資料館で知識を共有できるから資料館ができて良かった。資料館で一番心に残った展示物は医療刑務所の独房だ。楓の森小・中学校が建つ前の刑務所から建てまし一部を展示してあるため物で、楓の森小・中学校の歴史遺産でもある。楓の森生徒全員に資料館に行ってほしい。

映像や音声を駆使 体験型歴史資料館

私達は、菊池恵楓園歴史資料館に行き、展示物を見た。施設の設計にあたり、四つの工夫ポイントがある。

一つ目は、「ガイダンス映像」である。ハンセン病のこれまでの映像がコンクリートの壁に写し出され、それにそって展示物が並べてあることである。そのため、時代ごとに比較しながら見ることができる。

三つ目は、実物が見れることである。実物を見ることで、その時の様子を想像できる。音声が出るタッチペンでは、実際の音などを聞くことができる。ハンセン病患者に多く見られる「羞恥」というサングラスが生活の必需品となったことが分かった。

四つ目は、「タッチパネル」で自分が知りたいことを調べられることである。例えば、何歳のときにハンセン病にかかったかを男女別で調べることができる。

二つ目は、「展示物の流れ」である。

楓の森の生徒には、ハンセン病の正しい知識や、入所者の方々の思いを知ってほしい。そして、ハンセン病問題について正しい発信者になってもらいたい。

水俣病資料館 続く苦しみと

七月二十日に水俣病資料館に行き、展示物や色々な資料を見学した。最初に中に入ると入った時から多くの資料が見えた。最初に、資料が見えた。最初に、水俣病で亡くなった方の顔写真が多く展示してあった。次にたくさんの、環境復元ともやい直しの資料を見た。

市民が望む水俣の再生のことが書いてあった。その次に、被害者の拡大や因窮する被害者という資料を見た。多くの水俣病の様子の資料や展示物が多くあった。記事の中には「対応の遅れから、多くの被害者が苦しみました」と書いてあった。この言葉は、とても重い。最後に見たのは、水俣病の被害と補償という資料。記事の中には「被害を受けた聞いは今もなお続いている」と書いてあった。「今なお続く苦しみが伝わってきても、と深く知ることが大切だと思った。

絵画クラブ 金陽会 知らないを見に行こう

昨年の二月、楓の森小・中学校の地域交流室で、菊池恵楓園絵画クラブ「金陽会」の絵の作品展が開催された。金陽会とは、ある看護師さんの呼びかけにより、発足した恵楓園自治会の絵画クラブである。特定の師を持たず、独学で描かれた作品は九百点以上におよび、それぞれの違い記憶の中にある故郷の風景や家族、大切な友人への想いを込めた入所者の方々の作品が数多く生み出された。

菊池恵楓園資料館絵画クラブの担当者、藏座江美さんにこの作品展の意義について、インタビューした。絵が好きで独学で描かれた作品が九百点以上もあるということを、多くの人に知ってもらいたいということで始まった作品展だそうだ。コロナ禍で園内のみできなかった昨年度は、園内の歌家マップに沿って「納骨堂」「監禁室」などが、描かれた絵も作品として展示されたそうだ。

今年度は、十一月二十四日から十二月二日まで作品展が、開催される予定である。「知らないを見に行こう」をタイトルに、主に風景画を中心とした作品展になる予定だ。現在、絵を描かれている方は十名ほどだ。様々な思いを込めて描かれた絵から、楓の森小・中学生が何を感じ取るのかが大切だと考える。

絵を見ている楓の森中学生

ハンセン病問題啓発パンフレット『忘れないこと』

「忘れないこと」と合志市人権啓発教育課と菊池恵楓園入所者自治会が協力して制作された啓発パンフレットだ。このパンフレットについて人権啓発教育課に「全員に正しい知識をいろいろ、てもらいたい」と、いろいろのフレットを制作されたパンフレットの工夫は、マンガ版の読みやすいものになっている。

令和三年四月に合志市立合志楓の森小中学校が開校し、菊池恵楓園所在自治体として小中学生向けにハンセン病問題の啓発活動を強化したいと考えていたそうだが、子ども達に「広くアピールできる資料が不足していたことから啓発パンフレットを作成することを企画した。

パンフレットの工夫点は、実際にあった エピソードを多く取り入れ、他人事ではなく自分自身のこととして捉えてもらえるような内容・構成にしたことだ。また、合志市はアニメ・マンガを生かしたまちづくりを進めており、マンガの表現力を最大限に生かしたパンフレットにしたことだ。最もかっこいたのは、「恵楓園入所者自治会の方々の生の声を掲載したことで数十年も苦しんできた方々の心からの生の声が直接書かれている。

集団宿泊教室

七月十九日私達は集団宿泊教室で、あしきた青少年の家に行った。悪天候で予定していた活動が変更したが、みんなで協力し活動した楽しい二日間だった。

初めに「ドッチボビー大会」を、「ニュースポーツ」を行った。「シャッフルボール」「ペタンク」を行った。流木ディイ完スガイは苦戦したが、成した。

夜は「ワクワク絆フェスティバル」という名のクイズで決めたゲームを行った。

二日目は海に行った。北の海はとてもきれいだった。

この集団宿泊教室で学んだ事を学校生活でも生かしていきたい。

編集後記

私達は、主に恵楓園のことについての新聞をつくった。記事書きは大変だったが、どれもいい記事ばかりで、できあがりを見てもらえる喜びを感じた。ハンセン病や恵楓園の方々の思いを次の世代の人たちに広めていきたいと思った。そして、私たちも深く学んで発信しようと思いを強くした。

美陽 愛 麗 愛 姫 希 弥 紗
佑 羽 那 椿 循
甲斐 本 口 井 山 田 下
風 坂 高 中 古 山